

夕刊フジ 2008年5月22日

“昭和のジョン万次郎”が病んだ日本に喝！

竹中パートナーズ竹中征夫代表

「昭和のジョン万次郎」を自任する人がいる。国際舞台でM&Aを手がける竹中パートナーズの竹中征夫（ゆくお）代表＝写真＝だ。漁船が難破して心ならずもアメリカに渡り、日本の開国に寄与した幕末の漁師・万次郎に自らを重ね合わせる背景には、氏の日本企業への思いが込められている。



15歳で渡米 「外から経済発展に見続けてきた」

1942年、愛知県豊橋市生まれの竹中氏がアメリカに渡ったのは57年、15歳の時。進駐軍の通訳などをしていた父がそれより前に渡米し、呼ばれたからだ。

「父は“お前たちの教育のために呼んだ。アメリカの方がチャンスがある”といったが、それは後からつけた理由でしょう。僕はいやいや行ったんです。だって英語のエの字も知らず、チャンバラ映画ばかり見ていた少年だったんですから（笑）」

後にユタ大学で会計学を学び、首席卒業。8大会計事務所の1つピート・マーウイック・ミッチェル会計事務所に入り、67年に米国公認会計士の資格を取得した。

「ことばも流暢（りゅうちょう）ではなく、日本人ということで、最初はどこも採用してくれなかった。幸いロス的事务所に1人だけ空きがあったんです。ただ、会計事務所はアップ・オア・アウトシステム、つまり上に上がるかやめるかですから、安定した立場ではありません」

それでも通常13年ほどかかるところをわずか8年でパートナーになり、日本企業担当の責任者となった。

「日本企業の国際化で、米進出が盛んに行われた時期。そこで日立、三菱、ホンダ、マツダなど大企業の会計処理を手がけました。68年に日本ミネチュアベアリング（現ミネベア）のM&Aを手伝ったことが転機に。輸入規制がありベアリングを入れられなくなったが、ゼロからベアリングは作れないので、製造能力のある会社を買収した。それからM&Aのノウハウを覚え、89年に独立しました」

国際舞台でM&A手がける

M&Aを専門にするようになったのは、「会計事務所より企業の側に立って日本企業のグローバル化を助けたかったから」。ロスと東京に事務所を開いたが、軸足を日本に移してきた。

「バブル崩壊後、日本企業の意思決定方式が変わり、本社とつきあわないと仕事にならなくなった。おかげで、いまはアメリカを舞台にするだけでなく、東南アジアやインド進出のお手伝いもしています」

さて、「昭和のジョン万次郎」のわけは一。

「ある意味で僕は貴重な存在ではないか。日本の経済発展を外からずっと見続けてきたから。ジャパン・アズ・ナンバー1まで行き、その後低迷しながらも、もっとグローバル化していかねばなりません。万次郎が心ならずもアメリカに渡り、それでも日本の開国になにがしかの力を尽くしたように、僕も微力ながら力になりたいという気持ちです」

“しょうがない”が蔓延 もっと怒ったほうがいい

ただ、東京に腰を落ち着けてみて、気になることがあるという。

「若い人が人間の力を信じていませんね。1人の力が他人を動かシムーブメントになることを。それと、“しょうがない”が蔓延（まんえん）し、みんな怒りを忘れてしまっている。もっと怒ったほうがいい。日本は病んでいますよ。美しい国ニッポンを目指すというけど、もっと健全にならないと美しくならない」

昭和の万次郎の苦言だ。

■ジョン万次郎 本名・中浜万次郎。土佐の漁師で14歳のとき遭難。1841年、鳥島に漂着後米国船に助けられ、米国で生活。1851年に沖縄に上陸、幕臣にとりたてられ、日米修好通商条約批准使節団の「咸臨丸」で通訳も務めた。